

マインドマップで グループの力を 上げる

17

この章では、個人の集まりであるグループでマインドマップを作成し、ひとりひとりの創作能力を統合し、倍増させる方法を学ぶ。



マインドマップでグループごと進化する

マインドマップをグループで作る利点については、スベリー研究所のマイケル・ブロックが発表した論文にわかりやすくまとめられている。

「わたしたちは日常生活において、ひとりひとり異なる情報を無数に学んでいる。学ぶ情報が異なるために、それぞれが特有の知識や知覚を持つようになる。問題解決という課題を他者と共同で行う意義は、まさにそこにある。他者のマインドマップを結合させることで、連想を他者の範囲にまで広げられるからだ」

マインドマップをグループによるブレインストーミングに使えると、総意ができあがるまでを写しとった「ハードコピー」になり、結果的には、グループの記録、もしくは記憶となる。ブレインストーミングによって、個人の脳が「グループ脳」を作り上げるためにエネルギーを結集するのだ。マインドマップは、こうしたグループの進化を反映し、行われた対話を記録するものになる。

グループで作成したマインドマップが、優れた思想家がひとりで作成したマインドマップとほとんど変わらないようなものになれば

理想的である。

グループ・マインドマップの作り方

知識を確認し、適切な質問を行うことがプラスの効果を生み出すのは、多くの研究で明らかになっている。そうした効果はマインドマップを利用することでさらに拡大するだろう。フレーズとシュバルツが1975年にある実験を行った(*)。参加者を2人一組の3つのグループに分け、グループ1では、ひとりが文章を読み、その文章についてパートナーに質問する。グループ2では、ひとりが文章を読み、パートナーからその文章について質問を受ける。グループ3では、双方が文章を黙読し、パートナー間でのやりとりはなしとする。グループ1と2は、続いて行われた記憶テストで高い成績を示したのに対し、グループ3の成績は非常に低いものだった。

この結果を見ると、自分が知っていることと知りたいことをマインドマップに書き込むことで、読解力が向上する理由がわかるだろう。また、学習はひとりで言うよりも、2人、あるいはグループで行うほうがはるかに効果が大きいこと、黙読にくらべて学習対象について話し合うことが有益であるのもわかる。学習対象を積極的に言葉にすることが、情報処理と記憶再生の効率を高めるのだ。また、ほかの人との共同作業は、ユニークな視点を作り出し、参加者ひとりひとりを結びつけるので、より広範なマインドマップが出来上がり、高度で統合的な学習が可能になるのである。

グループ・マインドマップを作成する手順は、創造的マインドマップをひとりで作る時とほとんど同じである。違うのは、ひとりでマインドマップを作るときは脳内で静かに行われる作業が、グループではメンバーが体を動かして行うという点だ。

さて、ここで、グループ・マインドマップの作り方を7段階に分けて説明しよう。

1・テーマを決める

テーマを明確にし、目的を設定する。グループのメンバーに、討論に必要な

な情報をすべて与える。

2. 個人でのブレインストーミング

まずは各自が、最低1時間かけて速射法によるマインドマップを作り、BOI（基本アイデア）を明確にしながら、マインドマップを再構築し改良する（ここまでは、ひとりで行う創造的思考のためのプロセスの1と2にあたる）。

これは、メンバーのひとりが主導権を持ち、参加者から出たキーワードやアイデアをフリップやスクリーンに書きとめながら進める従来のブレインストーミングとはきわめて対照的な方法である。従来のブレインストーミングは、反生産的といわざるを得ない。発表された言葉や考え方が参加者の頭のなかに動きや流れを作り、グループ全体をある方向へと誘導することになるからである。非直線的な連想力が働かなくなるので、参加者がそれぞれ与えられたテーマについて自由に思考をめぐらすことにより得られるはずの多大な益を失うことになるのである。

3. 小グループでのディスカッション

次にグループを3つから5つに分ける。メンバーはグループ内でそれぞれの考えを発表し、他のメンバーから出た意見を自分のマインドマップに加えていく。1時間ほどかけて行う。

ここで重要なのは、各メンバーが前向きに他のメンバーの意見を聞くことだ。出てきたアイデアは支持し、受け入れる。そうすることによって、アイデアを出す脳が、関連づけの鎖を伸ばし続けようとする。鎖をつないでいけば、あまり重要ではなく、ばかっているとか、的外れとかに思えた考えから有意義なものが生まれることもある。

4. 複合マインドマップのたたき台を作成する

小グループでのディスカッションを終えた後、最初の複合マインドマップ

の作成にとりかかる。

大きめのスクリーンか、大きな紙を壁に貼ったものを使って、基本的な構造を記録していく。これはグループ全員で行ってもいいし、各グループからひとりずつ、マインドマップを書くのがうまい人を選んでもいいし、書記役をひとり決め、全部のグループのマインドマップを書いてもいい。

考えや要点がはっきりわかるように、色や記号の使い方については、全員の同意を得る。

BOI（基本アイデア）を選び、出た意見はすべてマインドマップで関連づける。この段階でも他のメンバーの意見は素直に聞く。グループ・マインドとしてここで作成されたマインドマップは、ひとりでブレインストーミングのためにマインドマップを作る際のステップ2と同じである。

5. 熟成させる

個人でマインドマップを作るときと同じように、グループ・マインドマップにとっても「熟成」は大切である。

これは従来のブレインストーミングと大きく違う点だ。結果が得られるまで次々とアイデアを出し、分析し、追求していくという従来のやり方では、脳の能力の一部しか使えず、得られる結果は、その部分の働きよりも小さいものになってしまう。脳が本来持っている思考能力を排除してしまうので、排除した能力を「使わない」だけではなく、使っている能力の共同作業も行われなくなる。

6. 再構築と見直し

少し時間をおいたら、再度ステップ2、3、4を繰り返す。これは新たに考え出され、統合された思考を取り入れていくためである。すなわち、各自が速射法でマインドマップを作成し、それを再構築・改良してメインプランチを明確にしたら、小グループで意見交換し、マインドマップを改良して、2つめのグループ全体のマインドマップを作るのである。

すると、最後のステップの前に、2つの大きなグループ・マインドマップの比較ができる。

161 ページ下のマインドマップは、デジタル機器会社の取締役 8 人によるグループ・マインドマップである。8 人のメンバーは、マシュー・バク（マイクロシステム部長）、トーマス・スピノーラ（セカンドシフト部長）、トーマス・サリバン（財務部長）、クリス・スラバハ（フィールドサービス部長）、ロリータ・ウィリアムズ（部長）、リチャード・コフラー（専門技術部長）、トニー・ビゴニア（フィールドサービス部長）、ジョン・ラグズデール（フィールドサービスマネージャー）である。彼らはチームワークの強化のために 5 日間にわたって作業を行い、非常に前向きな結論に到達した。

7・分析と決断

この段階では、12 章で概要を述べた方法を用いて、批判的な視点から決断、目的の設定、プランの構築と校訂を行う。

グループ・マインドマップはこんな場面で使う

グループ・マインドマップは、次のようなとき使用できる。

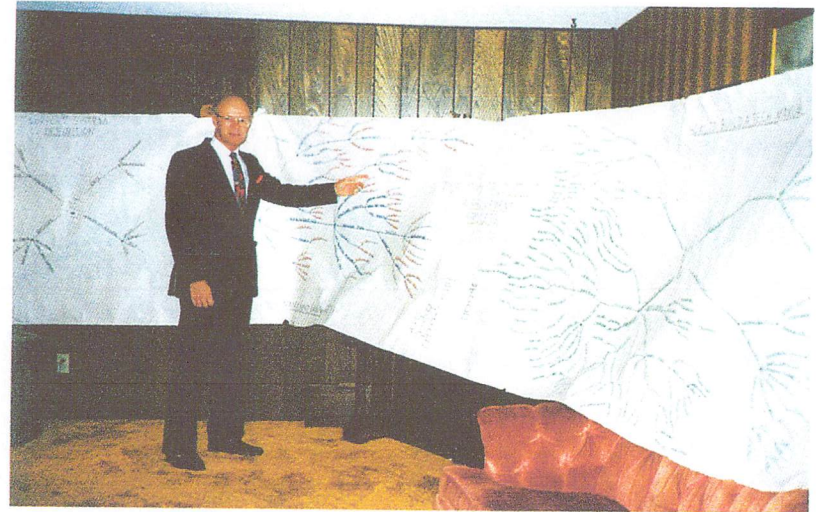
- 共同作業による創作
- 共同作業による記憶再生
- グループによる問題解決と分析
- グループによる意思決定
- グループによる企画運営
- グループによる研修もしくは教育

グループ・マインドマップの実用例

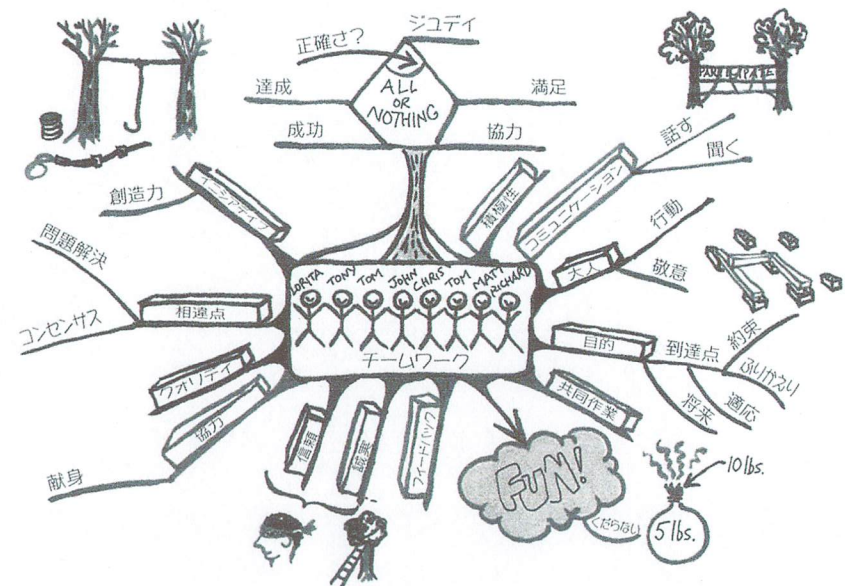
近年、家庭や学校、大学、企業などでグループ・マインドマップを用いて、大きな成果をあげている例が数多くある。

ボーイング社では、技術マニュアルを長さ約 8 メートルのマインドマップにまとめている。その結果、従来は上級航空技師チーム 100 人の研修を行うのに数年かかったが、それをわずか数週間に短縮することに成功し、約 1100 万ドルのコストが削減された（161 ページ上の写真）。

エレクトロニカル・データ・システム（EDS）社、デジタル・エクイッ



約 8 メートルにおよぶグループ・マインドマップを前にするスタンリー博士。



デジタル機器会社の取締役 8 人によるチームワーク向上のためのグループ・マインドマップ。

プメント・コーポレーション、ナビスコでは、最大120名にもなる上級職の特別研修を、グループ・マインドマップおよびマインド・マッピング・オーガニック・スタディ・テクニック（MMOST）を用いて行っている。書籍4冊から6冊分の情報量に相当する内容の研修に要する時間はわずか1日で、受講者は情報をマインドマップ化することによって、理解し、統合し、総括した上で、各々の職務場面へ関連づけている。

また、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学では、エドワード・ヒュー（『Use Your Head』参照）らの学生が、グループ・マインドマップを利用して、学習時間を最小限に抑えながらも、試験ではほぼ最高レベルの結果を得ている。

世界を見渡すと、「天才ファミリー」といわれる人々が出現している。そのような場合は、家族がグループ・マインドマップを形成し、両親や、子どもたちそれぞれが、追求する知的（しばしば身体的）分野で活躍している。「天才ファミリー」の日々の学習の詳細については、本書21章と24章で説明する。

2人で作るマインドマップ

グループ・マインドマップの基本は、2人の人間がパートナーとして共同作業による創作活動を行うペア・グループ・マインドマップだ。2人でマインドマップを作る手順は、21章で説明する大人数のグループ・マインドマップとほぼ同じである。

- 1 ● 課題を決める。
- 2 ● 各々が速射法マインドマップとたたき台のマインドマップを作成する。
- 3 ● 2人で話し合い、アイデアを交換する。
- 4 ● 最初の共同マインドマップを作成する。
- 5 ● 新たに統合されたアイデアについて、個々に熟考する。
- 6 ● 共同マインドマップの再構築、改良を行う。
- 7 ● 分析と意思決定を行う。

共同のマインドマップはプロジェクトが長期にわたる場合（著者が本書を共同で執筆するのがその例である）に、いくつか利点がある。まず長期間にわたって何度も行われるミーティングでの対話を刺激し、整理し、記録する。また、さまざまな共同作業を継続性や勢いを失わずに行う助けとなる。

グループ・マインドマップの利点

- 1 ● 人間の脳にとって自然な思考法であり、学習法なので楽しんで取り組める。
- 2 ● グループ・マインドマップ作成中においては、個人もグループもどちらも常に同じように重要である。個人の貢献が無駄にされることはなく、個人が各々の知的宇宙を探索する時間が増えれば増えるほど、グループに提供し、貢献するものが多くなる。
- 3 ● グループ・マインドは個々のメンバーの貢献によって形成されると同時に、個々のメンバーに知識をフィードバックする。それにより、メンバーがグループ・マインドに貢献できる能力がさらに高まる。
- 4 ● 従来のブレインストーミングに比べて、早い段階から、より実用的で創造的なアイデアを引き出すことができる。
- 5 ● グループ内で自然発生的にコンセンサスが形成されるため、団結力を強化し、目標達成に向けて一丸となって取り組むことができる。
- 6 ● メンバーから出される意見はすべて、有効なものとして受け入れる。よって、メンバーひとりひとりが、自分自身の考えがグループのコンセンサスになりつつあると思えるようになる。
- 7 ● グループ・マインドマップにより、グループの記憶のハードコピーが作られる。また、ミーティング終了時点で、グループの各メンバーが、活動成果について共通の理解を持つことができるようになる（従来の方法では、参加者が得る理解は仮定的なものに過ぎず、あとになって個々のメンバーの意見が異なることも多い。この点もまた、大きな違いである）。
- 8 ● グループ・マインドマップは、メンバー個人にとっても自己啓発の強力なツールとなるうえ、個人が関連するアイデアを試したり探したりする

ときは、目標として参考になる。

本章およびここまでの章で、個人の独自性が強ければ強いほど、自己とグループへの貢献が大きくなることがわかったと思う。この独自性を高めるために、自分独自のマインドマップのスタイルを作り上げていくのが効果的で楽しいだろう。

次の章では…

個人およびグループで使用する、シンプルでなおかつより発展的なマインドマップ作成の基本的なトレーニングはこの章で終わりである。第5部では、新しく学んだスキルを活用するための、刺激的な事例を詳細に検証する。最後に、マインドマップとコンピュータを用いる新たな方法、および放射思考と知的革命の未来に関する著者の見解を紹介する。

第5部

マインドマップを 使いこなす方法

18章から29章では、これまでに習得したマインドマップのスキルの実践的な利用方法を紹介する。まず個人で使う方法（自己分析、問題解決、スケジュール表など）、それから、家族で使う方法、学校などで使う方法（考え方、教え方、本や講義やビデオをマインドマップで記録する）、そして最後にビジネスの場面で使う方法について説明する。新たに開発された、コンピュータを用いたマインドマップ作りや放射思考の将来についても考えてみたい。第5部は順を追って読んでもいいし、必要だと思う章だけに目をとおしてもいいだろう。

- 個人編
 - 自己分析
 - コミュニケーションの問題解決
 - マインドマップ・スケジュール術
- ファミリー編
 - 知育と家庭学習
- 教育編